

# マルコによる福音書 2:23-28

## 「掟は命のために」

2024年4月21日(主の日)

聖日遵守という言葉をご存知の方も少なくなってきたかもしれません。日曜日をまるごと主にささげる、つまり午前中の礼拝だけでなく、一日まるごと主イエスのこと父なる神のことを覚えよう、そのために午後も何もしない、という教会の風習です。かなり厳密な信仰生活を求めたアメリカの昔の教会だけでなく、日本でも行われていたそうなのです。わたしよりも年が若い牧師が子どもの頃の経験を話してくれたことがあります。その人のお父さんも牧師で、イングランド、スコットランドの神学的文書を翻訳し、その分野では有名な神学者でもありました。その家では、日曜日はみんなで礼拝に行くのですが、子供は午後には勉強をしてもいけない、といわれていたそうです。中学生の受験生で勉強しないわけにはいきませんから、こっそりやっていたそうですけれど、わたしよりも年下なのに、そんな家があったのかと驚きました。わたしたちも、礼拝が終わったら、さあ何をしようか、どれからしようか、とやらなければならないことを考えます。家族が信徒でない人は家に帰ってやらなければならないことがある、「今日は安息日といって何もしてはいけないんです」などと言えるわけはありません。教会でも、礼拝のあとにやるべき奉仕や会議、集会があります。家のことにしても教会のことにしても、本当はやってはいけないんだ、などということを行っているのではありません。大事なことは主の安息のうちにあるか、安息から生み出されているか、ということです。家族に仕えることも教会で奉仕することも安息から生まれるものであって、忙しくすることそのもの、また大変な思いをすることそのものが信仰ではないことは忘れてはならないことでしょう。ですから、わたしたちは継続的に長老の職務から考え直して長老会を整え、執事を整え、奉仕を整えようとしているのです。礼拝において御言葉に与った者が家庭においても教会においても、たとえ忙しくても平安のうちに生きるようにと整え、心を配るのは教会の責任だからです。まだ途上ではありますけれど、年度の初めに新しい体制と奉仕者を与えられたこのときに、安息日についてあらためて立ち帰らされる恵みの御言葉をいただくことは幸いなことだと思います。

今日の話はまったく難しくありません。ある安息日に、弟子たちが麦畑を通りかかった時に、お腹がすいたので、麦の穂を摘み始めます。それを見ていたファリサイ派の人たちが主イエスに「なぜあなたの弟子たちは安息日にしてはならないことをするのか」と難癖をつけます。これは実は難癖なんですね。安息日の規定では、麦畑で穂を摘んで食べることは許されていました。わざわざ、はっきりとそう書いてあります。それは、貧しくてお腹が空いた人が食べてもいいように、畑の持ち主はそういう憐れみの心を持つように、との定めです。もちろん、人の畑に鎌を持っては行って刈る、などということはしてはいけません。ところが、この主イエスの時代のファリサイ派の人はそういう精神を忘れて、た

だ決まりを守るか守らないか、ということだけに腐心し、そしてルールを厳しくしていき  
ました。なんのためにルールがあるのかを忘れてしまい、ただルールを守るか守らないか  
ということだけを一生懸命にやってしまうようになっていたのです。そこで、もともとの  
律法の精神、安息日の精神がどこかにいってしまったのです。これは、忙しい中でもとも  
との意義を忘れてしまう、わたしたちの世にもよく見られることであるかもしれませ

ここで、もともとの安息日の精神を、十戒にもどって確認しておきたいと思います。出  
エジプト記の講解説教の中で十戒も聞きました。その箇所出エジプト記 20:8 を改めて聞  
いてみます「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕  
事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。  
あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も家畜も、あなたの町の門の中に桐生する人々も同  
様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれ  
たから、主は安息日を祝福して聖別されたのである」。天地の創造の七日目に主なる神は  
休まれ、その日を安息日として聖別なされた、仕事を休んでこのことを覚えよ。これが安  
息日を守る理由です。もう一つ見ておきます。十戒は申命記の第5章にも記されています。  
内容はほとんどおなじなのですが、興味深いことに、安息日を守る理由は違うのです。5:12  
「安息日を守ってこれを聖別せよ。」ここと、その後、みんなやすまなければならない、  
という文章はだいたい同じです。そしてその後の理由がこうなっているのです「あなたは  
かつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあ  
なたを導き出されたことを思い起こさねばならない。」ここでは出エジプトの出来事を思  
い起こして安息日を守るようにと定められています。家すら得るの民の主なる神は、われ  
われをエジプトの地、奴隷の地から導き出してくださったではないか、そのことを仕事を  
休んで、思い起こしなさい、と定められているのです。

ですから安息日には2つの意味があるのです。1つは創世記から、天地創造の神を思い  
起こすことです。しかし、神様が休んだからわたしたちも休む、という表面的な話ではな  
いと思います。創世記第1章の終わりのところに記されているのは六日で造った被造物を  
神があらためてご覧になったときのことが記されています「神はお造りになったすべての  
ものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」。神はこの世界の全てと私たち人間  
を、極めて良いものとして造って下さったのです。七日目を安息日として聖別なされたの  
は、この極めて良い世界を見つめて喜び、祝福なさるためです。神が私達の世界を喜び、  
祝福して下さっている、その喜びにあずかり、自分の生活が神様の祝福と恵みのある  
ことを確認する日として安息日が与えられたのです。わたしたちは、ともすれば自分の忙  
しさを誇り、その結果なしとげたことを喜ぶことをします。それ自体がすべて誤りとは言  
いませんが、しかし、それらも含めて神がお造りになり支配しておられるこの世界におけ  
る、神の恵み、極めてよい、と言ってくれる世界なのです。そのことを思い起こし、恵  
みに与るのが安息日であり、安息日の礼拝です。安息日の目的は「仕事を休む」ことそのも  
のにあるのではなくて神がわたしたちを「極めてよいもの」と御手くださっていることを

改めて知る、愛されていることを知るといってもよい。そのような神様の祝福、恵みをいただくことにほかならないのです。

しかし、そこでわたしたちはもう一度問わなくてはいけないかもしれません。いくら神が最初に「極めてよかった」と言ってくださったからといって、わたしたちの目には、この世界はまったく「極めて良い」世界に見えないからです。人間の愚かさは、未だ暴力によってなにかを得ようとし、解決しようとし、満足を得ようとし、します。それらの暴力、攻撃を止めることもできません。自分と少しでも違う人に敵意を向け、あるいは無視をし、自分と同じになるようにと圧力を加え、自分の思い通りにならないと仲間はずれにします。とても「極めてよい」ものがすることとは思えないのです。

一方でわたしたちは、今眼の前で戦争が起こっているわけではないわけで、日曜日の朝だけは、いろいろな心配やわずらいを横において、一旦忘れて、礼拝のときだけでもおだやかに過ごしたい、と思うこともあるかもしれません。たしかに、主の日の礼拝のこの時間は聖別された時間、世からとりわけられて神にささげられている時間ですからそういう面もあるでしょう。けれども、世界で起こっていることを無視するわけにはいかないのです。厳しい現実には立ちむかっていく祈りと行いが生まれなければ、いったい信仰とはなにか、ということになってしまいます。けれども、そこでなお、神は極めてよいものとしてこの世界をお造りなされたのです。その中には当然人間も含まれています。特に、対話をし愛する相手として創られた人間が神にとって「極めてよいもの」でなかったわけがないのです。もし今、極めてよいものに見えないのであれば、そのことを悲しんでおられるのはほかならない神御自身であられると思います。だからこそ、そのわたしたち人間を極めてよいものとするために、神はご自分の御子を送ってくださいました。その御子イエス・キリストを遣わして、そのままでは、極めてよいものどころか、神から離れて滅びてしまう、そのような人間をその罪から十字架によって救ってくださいましたのです。神であられた主イエスは、わたしたちを極めてよいものとして取り戻すために、わたしたちを造られた側であられたのに、わたしたちと同じになり、わたしたちの罪をすべて引き受けてくださったのです。罪の奴隷であったわたしたちをそこから贖い、救いだしてくださいましたのは、主イエスにほかなりません。だから、申命記に記される、神が奴隷の地から救い出してくださいましたことを思い起こすことは、わたしたちにとっては間違いなく、主イエス・キリストを思い出すことです。

安息日にはしてはならないことをしている、と非難してきたこのファリサイ派の人々に対して、主イエスはダビデの話をなさいました。このできごとはサムエル記上 21:1-7に記されています。まだサウルに仕えていた時代のダビデは、しかしサウロに命を狙われて、逃亡の旅にでます。お供のものと落ち合う場所に向かう途中、ダビデは空腹にさいなまれ、祭司アヒメレクのところに行きます。今日のマルコによる福音書の方にはアビアタルという名前になっていますが、期にしないでいいでしょう。しかし、その祭司のもとには備えられて聖別されたパンしかありません。このパンは祭司しか食べてはいけない、という律

法の定めがあったのです。けれども、祭司はダビデとそのお供の者たちのためにこのパンを渡します。ファリサイ派の人もこの話は知っていたでしょう。そこで主イエスはおっしゃいます。「安息日は、人のために

定められた。人が安息日のためにあるのではない」つまり、安息日、律法は人間がまことに神のもとに幸いな者として生きるためにあるものであって、その律法によって人が苦しめられるのであれば本末転倒だ、と律法を思い起こすようにとおっしゃるのです。礼拝は神の安息に入れられ、恵をいただくために、私達人間のために神が与えられた恵です。それが、礼拝のために苦しい思いをするのであれば本末転倒なのです。決してお気楽なものになるわけではありませんが、神が決めてくださった恵の時です。しかし、それは人情が最優先で、ならば律法などという窮屈なきまりなど、いらぬ、ということにはなりません。わたしたちは神から教えられなければ、救われた跡もどのように生きるかわからず、神の子としていつも主イエスに歩むべき道を示していただかなくてはならないのです。そこで、主イエスのもう一つの言葉「人の子は安息日の主でもある」という言葉につながります。

このダビデはこの後、王になります。それは神のご計画です。ここで空腹を満たされ、力を得てダビデが立ち上がることができた、生き延びることができたのは、単に祭司が律法を超えて憐れみを与えたからではありません。この事自体も神の救いの計画の一巻なのです。そして、このあとこのダビデの家計から主イエスがお生まれになります。ダビデにおいて律法を超えて神のご計画が行われたというのであれば、まして主イエスとその弟子において、神のご計画が律法を超えてあきらかになるのは当然のことなのです。

この祭司が持っていたパンは「供えのパン」とサムエル記には記されています。しかし単なるお供え、という意味ではないのです。不思議なことにこの言葉は、「現在のパン」、「今あるパン」というような意味を持つ言葉なのです。それは「神の御前にあるパン」とも言えます。神がおられ、神の御前にあるのです。ここでパンがダビデに与えられた出来事は、神の御前で出来事でした。おなじように、安息日を見るとき、それは、主イエスによって、安息日に生きる者が神の御前に置かれている、「極めてよい」といつてくださる神の御前に、その眼差しの中に置かれている出来事となるのです。わたしたちはただ、旧約聖書を調べれば安息日の心を取り戻すことができるというわけではありません。安息日の意味を取り戻すこと、そのもの、私達自身が安息日にまことにあずかることができるのは主イエスによるのです。だから、人の子つまり主イエスは安息日の主なのです。安息日の心を忘れて、何をしたいかしてはいけなかと問うことには意味がありません。ただ苦しいばかりです。そしてさらに、主イエスなしにまことの安息を知ることもないのです。「極めてよい」、「あなたたちは極めてよい」と神がいつてくださるのは、まさに主イエスの御前においてです。

今、まだ極めて良いように思えない現実があります。戦争があり、災害があり、感染症があり、経済不安があり、政治不信があり、格差があり、人間関係の崩壊があります。そ

の中であって、傷つき、悲しんでいる人がいる、命が失われています。このままでは滅びてします。だからこそ神の救いのご計画にすがるしかありません。ここでこそ、わたしたちは神の救いのご計画が進み、成就することを信じて祈り続けます。この世界は主イエスに祝福されているのだと信じるところにしか希望はないからです。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」。ここでわたしたちがあきらめてはならない。安息日に恵をいただいた者は、まだ実現していない救いのために祈る者とされるはずです。

わたしたちの聖日遵守は礼拝に集中していくことになります。そこに安息のまことの意味があるからです。これからも、主イエスがあたえてくださる安息に与る礼拝を感謝して歩んでいきましょう。